第１章　学級経営よもやま話
第５節　５０日が勝負

この節は、
■「５０日が勝負」の意味するところ■
■「１ヶ月で勝負」したクラスの記録■
の２つの項から成っています。

■「５０日が勝負」の意味するところ■

学級開きから数えて５０登校日というと、６月の中旬になります。「５０日が勝負」というのは、学級経営は６月中旬までが勝負だという意味です。

アメリカに「ハネムーン期間」とよばれるものがあります。大統領就任後最初の１００日間は温かく見守ろうというもので、「１００日ルール」とも言います。その１００日間に政権の明確なテーマ(目標、目的)を示すことができるかが、新大統領にとって最初の正念場です。これに失敗すると、以後、議会やマスコミからの鋭い攻撃に晒されることになります。

アメリカ大統領の任期は４年、私たちの任期は１年です。私の経験からすると、私たちに与えられた「ハネムーン期間」は５０日です。

たとえ学級編成替えがなかったとしても、つまり変わったのは学級担任だけだったとしても、学級集団も学習集団も昨年度の続きからスタートというのではありません。経験則で言えば、集団は前年度のピーク時より何割か戻った状態でスタートすると考えた方がよさそうです。

たとえ教師間の「ものさし」が揃っていたとしても、担任の人間性はみな違います。その違いが指導の仕方の違いになって表れます。
「忘れ物ゼロをめざす」という「ものさし」を共通課題にした時、Ａ先生は忘れ物調べの表を作り、時にはペナルティーも科しながら指導したとします。一方、

Ｂ先生は忘れたことで困ったという経験を子どもにさせて、自己改善させていく方策をたてたとします。ともにめざすところは同じでも、この種のアプローチ(手法)の違いは常にあります。

担任が５０日の間にすることは、先の２つの「たとえ」をクリアして、子どもたちを自分色に染めることです。
学級生活と学習の両面において、担任と子どもたちの間に一定のルールが確立し、それが軌道に乗ること。そのことによって、担任にとっても子どもたちにとっても、教室が居心地の良い場所になってきていること。担任と子どもたちが同じ目標に向かって歩み始めていること。…５０日経過時の検証軸はそんなところでしょうか。それが、「子どもたちを自分色に染める」という中身です。

ところで、なぜ５０日なのかということです。
年度初めの定期家庭訪問が終わり、子どもの様子や家庭の状況がつかめたころ、学級経営方針(学級目標)が定まってきます。それが大型連休前後です。そして、クラスが本格的に動き出して４週間が経過すると、はや６月、５０日目はすぐそこに迫っています。その時点で、ちょっとした手応えを感じながら軌道に乗ってきているかどうかが、クラスの１年間を占うバロメーターになると言えます。

実は、力及ばす、スタートの「５０日」を達成するのに秋までかかった経験があります。学級崩壊状態のまま４年生を終えたクラスを、５年生で担任した時のことです。生活や学習の規律を回復し、クラスが私のペースで動くようになるまで、半年を要しました。マイナス状態をゼロベースまで引き上げることはできましたが、その上に新しいものを築くには時間が足りませんでした。詳細は、「第５章　教師力とは何か」の「第１節　教育課題をマネジメントする」で紹介します。

■「１ヶ月で勝負」したクラスの記録■

１度だけ、「１ヶ月で勝負」したクラスがあります。

２００２年４月、１０年振りに子どもたちの前に立ったのが３年生のクラスで、それが２００５年度６年生、つまり「連凧の子ら」になる。(注：その前の５年間は天

理市同和教育研究会の事務局長、さらにその前の４年間は同和教育推進教員で、都合９年間、学級からも授業からも遠ざかっていた。）

このクラスの置かれていた状況に触れておかなければならない。もともと女子のパワーに圧倒されていたクラスに、４年生の半ば、活発な女の子が転入してきた。クラスのバランスが崩れ、友だち関係がそれまで以上に難しくなった。さらに、保護者との対応に担任が翻弄される状況が続いた。クラスは深刻な窒息状態に陥り、６年生を迎えることになる。

学級開きの日、私は最初の１か月が勝負だと思った。１か月の間に教室の空気を変えなければならない。子どもたちに変わったと自覚させなければならない。それができなかったら、この１年は終わりだ。教室は深く病んでいた。

■■小学校６年・学年つうしん

きらきら MORE

2005. 4. 6（水）

No.1

一段ときらきら輝いて生きよう!!

きょうから６年生。最高学年のスタートです。

「ただいま」そして、「みんな、おかえり」。再度担任させてもらうことになりました。どうぞよろしくお願いします。

…略

この２年間、いつもとなりの教室からみなさんを見つめてきました。なつかしい『きらきら』最終号(注：３年生の時の学級通信)を読み返してみましょう。

みんなかがやきを秘めている

４月８日の始業式の日、ぼくはみんなに「きらきらかがやいて生きよう」とよびかけた。人がかがやくというのは、その人らしく力一杯生きているということだ。一人ひとりのかがやきは、みなそれぞれにちがう。金子みすゞの「みんなちがって　みんないい」という言葉の通りだ。自分らしく生きている人は、瞳がかがやいている。そして、表情が明るい。

１年間みんなを見てきて思うのは、表情がおだやかで明るくなったということだ。みんなそれぞれのかがやきをみせてきたと思う。すばらしいことだ。しかし、同時に思うのは、もっともっとすごいかがやきを秘めているということだ。秘めているというのは、もっとかがやくかもしれないし、もうそれまでかもしれないということだ。それは、きみたちがもっとかがやこうと努力するかどうかにかかっている。ぼくは、きみたちの努力に期待している。

勢いよく大空に舞う連凧になれ

人がもっとすてきな自分になろうと努力できるのは、それを見ていてくれるなかまがいるからなんだ。かげ口やあげ足とりはないだろうか。「すてきだね」「すごいね」という言葉が、すなおに出ているだろうか。

いつか見せた連凧の写真を思い出してほしい。いろんなかがやき方をしている凧が、一つにまとまって大空に舞う。クラスが一つになることの感動を、きみたちにもあげたかった。今日で３年生が終わるが、これは４年生の宿題に残してしまった。きみたちにはできるはずだ。

さて、２年間で何が達成され、何が「宿題」として残ったのでしょうか。そっと振り返ってみてください。そして、みんなで考え合いたいと思います。ぼくは、きみたちと連凧のように強くつながりあったクラスを作りたいと思っています。

泉岡くんと中川くんを迎え、６年生は 25 名のなかまでスタートします。学年通信は、『きらきら』から『きらきら MORE』にバージョンアップします。MORE（モア）というのは、「もっと、一段と」という意味の英語です。一段ときらきら輝いて生きていきましょう。そして、一人ひとりが力を出し合って、「いろんなかがやき方をしている凧が、一つにまとまって大空に舞う」連凧のようなクラスにしましょう。今日は、ぼくらのクラスの誕生日です。

■■小学校６年・学年つうしん
きらきら MORE
2005. 4. 8（金）
No. 3

４月６日、出会いをつづる

■田中沙季

今日、離着任式がありました。校長先生と今中先生が出て行かれて、また新しい先生が入ってこられました。二人の先生がいなくなったけど、新しく入ってこられた先生方も優しそうで良かったなあと思いました。次に、始業式がありました。そして、私が一番楽しみにしていた担任の先生の発表が、校長先生からありました。私や友だちは、五年生の時から、「次の担任は草尾先生がいい。」と言っていました。でも、私は三年生から新しく来られた先生ばかりに受け持ってもらっていたので、今回も草尾先生が担任になることはないだろうと思っていました。すると校長先生が、「六年生の担任は、草尾先生です。」と言ったので、みんな静かにしなさいと言われていたのに声を出して喜びました。式が終わった後、教室に草尾先生が入ってきました。そしてみんなに学級通信を配られました。その通信を見たとき、私は、三年生の時一人ひとりにもらったノーベル賞を思い出しました。私は、「漢字ばっちりで賞」をもらいました。その時はうれしかったです。

これからも、いろんなことを頑張っていきたいと思いました。
■ドキドキ担任の先生発表■木﨑唯
　春休みが終わり、一学期スタート。六年生としてこれからがんばっていかんなんなあと思っていました。けれど私が一番気になっていたことは、担任の先生です。私が一番担任になってほしかったのは草尾先生でした。なぜかというと、おもしろいし三年生で一度担任の先生になってもらったからです。そして、離任式が終わり、校長先生と今中先生を送ってから、草尾先生に、「六年生の担任の先生だれ？」と聞くと、「イニシャルが『Ｚ』で始まる人。」と言いました。だから私は、「そんな人いないやん。」と言ったりして、その時もだれかな、だれかなと思いました。そしてとうとう校長先生から担任の先生の発表が始まりました。「六年生・・・草尾先生。」「えっ、ほんと？」とびっくりしました。でもうれしかったので、やったあと心の中で言いました。みんな手をたたいたりしました。これから草尾先生との新しい授業、新しい六年生二十五名でがんばっていきたいと思いました。
■喜多真弓
　「まだかなあ。」とドキドキしながら耳をすませて聞いていました。すると、校長先生が、「六年生、草尾佳秀先生。」と言ったとき、私たちのクラスのみんながワイワイとさわぎながら喜んでいました。担任の先生が全員決まり、始業式が終わった後、みんなが立ち上がって、さっきよりももっともっと喜んでいました。私も大家さんと籔内さんとで手を組んで、「よかったなあ。」と言いながら喜びました。最後の学年だからがんばっていこうと思いました。
■大家美沙子
　私は、朝起きたとたん、ドキドキしていました。「六年生の担任の先生は誰だろう。」そう思いながら、私は学校に行きました。私は、離任式をしているときも、着任式をしているときも、「ああ、もう早く。担任の先生、誰なんよ。」と心の中で半分思いながら、やめられた先生の話や新しく来た先生の話を聞いていました。そして、いよいよ担任の先生を聞くときがやってきました。心臓は、ドキドキじゃなく、バクバクです。新しい校長先生が、発表しました。「六年生の担任は、・・草尾先生です。」と知らされたとき、六年生ほぼ全員が一せいに喜びました。草尾先生は三年生の時になったから、もうないんだろうなと思っていたけど、また草尾先生になって、私は満面の笑みをうかべるほどうれしかったです。
■今日は私たちの誕生日■久保西ひかり
　今日はとてもうれしい日でした。始業式が始まったとき、ドキドキしました。私は、「いつになったら六年生の担任の発表があるのかな。」と、ずっとドキドキしながら待っていました。…「どうか草尾先生になるように。」と言っていました。いよいよ発表です。はじめは六年生からでした。クイズミリオネアみたいな

感じで、とてもドキドキしていました。ついに、校長先生が言いました。それは、草尾先生でした。とてもびっくりしました。六年生の担任を二回も続けてするなんて、思っていませんでした。とてもびっくりしすぎて、泣きそうになりました。担任が草尾先生でよかったです。みんなの誕生日になりました。これから六年生としてがんばっていくので、よろしくお願いします。

■阪口真唯

「六年生担任、草尾佳秀先生。」と、松野校長先生から発表されて、私たち六年生は「やったあ。」と喜びの声をあげました。草尾先生には三年生の時に持ってもらい、四年生に上がっても担任になってほしかったのですが、残念でした。五年生になったときも。そして、六年生になり、草尾先生が私たちのクラスにもどってきてくれました。先生、ありがとうございます。三年の時の『きらきら』を読むと、とても楽しいものも、勉強になるものも、そして病気のことも、いろいろありました。私は、あと一年だけど、最終号の「みんなかがやきを秘めている」に書かれていた「残された宿題」をしたいと思います。先生、これから一年間よろしくお願いします。

■びっくりぎょうてん始業式■乾奈緒美

始業式前日。私はとてもドキドキしていました。なぜかというと、担任の先生が明日発表されるからです。私は、ご先祖さんに、「草尾先生になりますように。」とたのみました。そして、昨日の明日になってしまいました。朝見たテレビでは、おひつじ座は一番悪かったので、「ああ、だめかも…。」と思いました。始業式が終わり、担任の先生が発表されるときがきました。とてもドキドキしました。校長先生が前に出て、「六年生担任…。」と言って少し間があいたので、その時はとてもとてもドキドキしました。そして、校長先生が息をすったとき、「もうだめだあ。」と思いました。校長先生が、「草尾佳秀先生です。」と言ったしゅん間、みんながドワーとさわぎました。と同時に、少しおどろきました。草尾先生に、「担任やってやあ。」と言ってたことが本当になってしまったからです。「こりゃ、ご先祖さんにたのんだかいがあったなあ。」と思いました。草尾先生、ありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

■北野井利佳

私は、今日から六年生になると思うと楽しみでしかたありませんでした。でも、一つだけ不安なことがありました。それは、担任の先生のことです。式が始まる前にみんなで話していました。でも、まったく見当がつきませんでした。そして、いよいよ発表です。私は、すごくドキドキしながら聞いていました。すると、「六年生、草尾先生。」と、校長先生が発表したとたん、私はすごくホッとしました。これから一年間、前の六年生の人たちに負けないようにがんばりたいと思います。担任が草尾先生だった

■今西菜緒

今日は、私たちの担任の先生が決まる日だ。私たちは前からずっと草尾先生に「担任になってな。」と言っていたので、今日が待ち遠しくてたまりませんでした。そしていよいよ校長先生の口から、「六年生の担任は、草尾先生です。」と言われたしゅん間、私は思わず、「やったあ。」と言いました。担任の先生の発表が終わって、教室に入ってしばらくすると草尾先生が入ってきました。草尾先生が前に立っていると、何となく三年生のころを思い出したような気がします。私たちは最高学年になりました。全校のリーダーとして、みんなで頑張りたいと思います。

■新六年生になったぞ■坂本唯理

今日から六年生になってわくわくしていたけど、それよりもこわくて、楽しみにしていたことがあった。それは、六年生の先生だ。先生で一年が変わるからだ。私たちの一番担任になってほしい先生は、草尾先生だ。まさにドキッとする時がきた。「く」と聞いた時、本当にドキッとした。そして、「草尾先生」と言われた時、ホッとした。真唯さんとガッツポーズをとって、「めっちゃうれしい」と小声でニコニコしながら言った。教室へ戻ると、みんなうれしそうにしていた。こんなほのぼのとみんな笑ってるのは何日ぶりだろうか。こんなみんなが笑ってすっごく楽しくしている時間がいつまでも続くといいなと、奈緒美さんたちと言っていた。卒業まで一年間、よろしく。

さて、学年初日の日記は草尾学級の恒例なのですが、担任発表の話題にこれほど集中したのは初めてのことです。おどろきとともに、１年間きみたちとがんばろうという元気をもらいました。

■■小学校６年・学年つうしん

きらきらMORE

2005. 4.14(木)

No.8

もっとすてきな明日のために

■四月十二日　なやんだ結果■木﨑唯

昼休みに学級委員を決めました。決め方は、今まで一度も学級委員になったことがない人で話し合って決めました。私は一度も学級委員になったことがなかったので、その話し合いをする人の中に入っていました。そして、みんなが集まったので話し合いが始まりました。私はやってみようかなあとは思ったけど、やっ

ぱりみんなをまとめたりする自信がなかったので、やめようかなあと思ったりしました。そして、なかなか決まりませんでした。私はその時思いました。「よし、いい経験にもなるし、今までの学級委員の人もがんばっていたので私もがんばろう。」と思いました。そして、「一学期の学級委員やる。」と言いました。その後、二月期、三学期の学級委員もすぐに決まりました。私は、これからみんなをしっかりまとめたり、学級会の司会などを上手にしていきたいと思います。

昨日のアンケートの結果をもとに、６年生スタートの１週間を振り返り、これからのことを考えたいと思います。

（１）６年生のスタートから１週間が過ぎました。クラスの空気・雰囲気で、どんな小さな変化でもいいですから、良くなっていると感じていることがあれば書いてください。

「明るくなった」と 10 人が書きました。「楽しそう」が２人、「笑うことが多くなった」「笑顔でいることが多くなった」と書いた人もいました。授業の雰囲気では、「今までにないくらい落ち着いている」「はっきり物を言う」と感じている人や、「音楽の時大きな声で歌うようになった」（２人）、「ちゃんと話を聞くようになった」（２人）と感じている人もいました。向田先生も、音楽の時間の雰囲気が変わったと言っておられました。まだ始まったばかりですが、クラスのエネルギーがプラスの方向に向かって動いていることを確認し合いたいと思います。

（２）一人ひとりが自分の力を発揮しながら、「連凧」のようにしっかりとつながりあったクラスにするためには、どうすればいいでしょう。あなたのアイデアを書いてください。

①クラスにあったらいいな、自分がやってみたいなと思う係や仕事（具体的に）

②たとえば去年の６年生が映画を作ったように、みんなで力を合わせて作り上げたいもの

①については、いくつかのアイデアが出されました。もう少し話し合いを重ねて、具体化していきましょう。②については、ほぼ全員が「映画」と書いていました。連凧を作って揚げるというのもありました。できれば希望通りになればいいなあと思います。（冷たいようだけど、今はまだ約束できません。）

ぼくの思いを聞いてください。きみたちは６年生の始業式の日、何かすてきなことがありそうだと、とても大きな期待をしていたと思います。「期待」というのは「あてにして待つ」ことですが、待っていると時としてあてがはずれることもあります。中学校の入学式で、校長先生がこんなお話をされていました。

くつを作っている会社の社員２人が、自社の製品を売り込むためにアフリカのある国を訪れました。しばらくして、社員Ａから本社に電話が入りました。「すばらしい我が社のくつを売ろうと期待していたのですが、絶望です。この国の人

たちには、くつをはくという習慣がありません。誰一人として興味を示しません。」社員Ｂからも電話が入りました。「この国の人はまだくつをはいていません。我が社のくつのすばらしさをアピールすれば、すべての人にはいてもらうことも夢ではありません。チャンスです。」２人の社員は同じ状況に出あいながら、Ａは「期待はずれ」と感じ、Ｂは「期待通り」と感じています。つまり、積極的な働きかけがあって「期待」が現実になっていくのです。

木﨑さんの日記を読んでいてうれしくなりました。木﨑さんが悩んだ末に出した結果こそ、社員Ｂの前向きな生き方なのです。３年ぶりに学級委員を選出した男子の思いも含めて、ぼくは一人ひとりの「なんとかしたい」という気持ちを大切にしたいと思います。（２）については、まだ「あてにして待つ」だけの人が多く、結論を出すことはできません。

（３）困っていることや悩んでいることがあれば、ちょっと打ち明けてみませんか。どうすれば解決できるか一緒に考えていきたいと思っています。

友だち関係の悩みを書いてくれた人が３人いました。ここに書けなかった人もいるかもしれません。きのうから、朝の不連続小説『五年四組のイカダ』が始まりました。物語に出てくる子どもたちは、あなたのとなりの席の友だちかもしれませんと、「はじめに」に書いていました。自分の心の中やクラスの友だちのことを静かに振り返ってほしい、ぼくはそんな思いからこの本を選びました。そして、いつの日か必ず、一人の悩みをみんなで解決できるなかまになってほしいと願っています。

■■小学校６年・学年つうしん
きらきら MORE
2005. 4.21（木）
No.15

６年生スタートから２週間

■四月十九日　なかなか決まらない学級会■木﨑唯

六時間目に、少しだけ学級会をしました。決めることは、一年生を迎える会でするしっぽ取りゲームにだれが参加するかということです。「何か意見はありませんか。」私がそう言いました。けれど、だれも手をあげてくれませんでした。でも、二人だけ意見を言ってくれました。けれど、その後は何も意見もなく、静かになってしまいました。何をしゃべったらいいのか分からなくなってしまいました。それで、草尾先生がこれはどうしたらいいと思いますかなど言ってくれて、

ほとんど草尾先生にたよってしまいました。今回の学級会は、だまってしまいなかなか進まず､明日までにどうしたらいいか考えてくるということになりました。次の学級会は、だまらないようにしたいです。学級委員になったとき、学級会の司会を上手にしたいと思っていたので、今度は絶対だまらないで上手にしたいと思います。

■四月十九日　昼休みの草尾先生■今西菜緒

今日の昼休みに、みんなで一輪車に乗っていると、向こうの方から草尾先生が二年生の人とおにごっこをしているのを見つけました。ずっと見ていたら、草尾先生が二年生にタッチをされて、おにになりました。すると草尾先生が、「わああ。」と言って二年生の方に走って行ったので、私たちは笑っていました。

６年生になって２週間が過ぎました。まだまだ雑然としていて形にはならないけれど､一生懸命に生きようとするエネルギーがあちらこちらで芽吹いています。きみたちの瞳がとてもきれいです。わくわくするような２週間でした。

25 日の１年生を迎える会、みんなの力で成功させましょう。

■■小学校６年・学年つうしん

きらきら MORE

2005. 4.26(火)　No.20

春の陽射しの中で…

■四月二十二日　旗作り■大家美沙子

今年は私たちがつげの子班の班長なので、それの旗作りをしました。まず、去年の六年生が作った旗をぼうからとることから始まりました。…やっとのことで取り終わって、新しい旗のデザインにとりかかりました。マジックで書いたらもう書き直せないので、私は、「もう書いたら最後やよなあ。何色にしようかな。」と心の中で思いました。「そう言えば、五年が、『グループの名前がスターウォーズやねんから、宇宙っぽくしてや。』って言ってたっけ。」そう思い、班の数字の十三の外側を青のマジックでふちどりし、黄色のマジックで中をぬりました。それから班の名前を書き、メンバーの名前を書きました。そうしてできあがった時、私は、「自分が班長なんだな。」と、改めて実感しました。これから一年間、十三班の班長としてがんばりたいと思いました。

■四月二十二日　友だちって何だ■濱本錦

家に帰って、寝る時によく思うことがある。それは、人はなぜ他人とじゃれ合うんだろうと思う。大体、なぜ友だちというものが存在するんだろう。他人との関係など、ただの知り合いかそれとも敵とした方がよっぽど楽だと思う。でもそれをもっと深く考えると、感情とは何だろうと思って、二年生の頃からいろいろとためしていると、変なふうに言われるからめんどうだと思う。（以下略）

■四月二十二日　ドッジビー■久保西ひかり

今日、二時間目にドッジビーをみんなでしました。五年生の時もしたことがあるけど、なにかみんなちがう感じでした。五年生の頃は、静かでしいんとしていました。それが、今日やってみれば、とってもワイワイしていて、とても楽しかったです。また今度体育する時も、ドッジビーをしたいです。

■四月二十二日　なつかしい場面■上野壮起

ぼくが三年生の時、草尾先生に写してもらったＣＤを、お兄ちゃんといっしょに見ました。内容は、体育館での発表でした。つげの子集会で、金子みすずさんの「私と小鳥とすずと」の発表でした。お母さんが、「あれ、草尾先生は。」と聞いたので、ぼくは、「先生、ビデオを写しているで。」と言いました。またもやお母さんが、「今とちがって、みんなかわいい顔してるな。」と言っていました。

ずうっと同じ教室で過ごしていると友だちのことならなんだって知っているように思うけれど、実は知らないことの方がはるかに多いのですね。

濱本くんは、言葉や行動の裏側で、友だちということを深く考え続けています。

日曜日の過ごし方だって、人によってさまざまです。上野くんは、自然の中に身を置くと、とてもすてきな詩人になります。

春の陽射しの中で日記を読みながら、教室の中だけでは分からない一人ひとりのことを、もっと知りたいなあと思っています。

■■小学校６年・学年つうしん
きらきらMORE
2005. 4.27（水）
No.21

１年生を迎える会を終えて

■一年生を迎える会■阪口真唯

一年生の入場から、この会の幕開けです。入場の時、なかなかみんなが言った

ことを守らないで、そろえるのに時間がかかりました。その時私は、こんなんでこれからのプログラム大丈夫かなと思いました。そんなことを思っているうちに、「阪口さんから、はじめの言葉。」と言われて、不安と緊張とで言葉が変になってしまい、もどるとみんなで笑っていました。そして、二年生から五年生の出し物が終わり、いよいよ六年生のしっぽ取りゲームです。六年生を送る会の時よりは、しっかりと言うことを聞いてできていました。ですが、ザワザワという話し声だけはあまり変わっていないと思いました。やっぱりしっぽ取りゲームは難しいということが、しっかりとわかりました。長いようで短かった一年生を迎える会でした。

■四月十九日　ＣＤ■坂本唯理

今日、家に帰ると、ＣＤをさがした。小さい、低学年ぽいヤツ。見つけたけど、合唱団の歌だった。聞いてみると、ううんとなやんだ。まあいいか。聞いたことのあるのがけっこうあった。「しあわらなら手をたたこう」とか「グリーングリーン」「キラキラ星」「シング」「ドレミの歌」とかいっぱいあった。でも、絶対使わないと思うなあ。

■一年生を迎える会■乾奈緒美

「班長さんは、自分の班を決められた場所に誘導してください。」と、私が言いました。でも、みんな打ち合わせ通りにいかなくて、バラバラになってしまいました。が、なんとかみんな考えてくれて、乗り切れました。それぞれの学年の出し物が終わり、いよいよ六年生の出し物です。とは言っても、私たち児童会は見ているだけでした。一年生を迎える会が終わって、私はみんなで協力することの大切さと、人の話を聞くことの大切さがよくわかったような気がします。

１年生を迎える会が終わりました。思い通りにいかないところもありましたが、６年生のみんなが力を出し合った最初の行事としては、成功だったと思います。

ぼくは、今回のことから２つのことを学び合いたいと思います。児童会役員の人たちは、この日のために多くの時間を使って準備してきました。本番では使わなかったものも含めて、十分すぎるほどの準備を重ねてきました。リーダーの仕事は、本番を迎えるまでの時間が勝負なのです。これが第１の教訓です。

しかし、どれほど準備をしていても、本番でのアクシデントはつきものです。そのとき、なんとか乗り切るためのとっさの知恵と行動力が必要なのです。そして、この知恵と行動力は、一人ひとりが自分の力を出し合って成功させようという思いの中から生まれるものなのです。これが第２の教訓です。

成功はみんなの財産、課題は次へのエネルギー源。期待しています。

■■小学校６年・学年つうしん
きらきら MORE
2005. 5. 9(月)
No.26

私たちの課題が見えてきた

６年生最初の１か月が過ぎました。ふわふわとした羽毛にくるまれたような、優しい時間が経過していきました。教室に流れる空気(ムードと言ってもいい)はとてもいいと思います。しかし、ムードだけではやがて物足りなさを感じる日がやってきます。ぼくが今感じている課題を示したいと思います。

私たちのめあて
一人ひとりがしっかりとした「凧」になろう！
大空にも心にも「連凧」を揚げよう！

私たちのめあては２つです。それぞれのめあてについて、具体的に述べていきましょう。

■一人ひとりがしっかりとした「凧」になるということ

自分の五感で見聞し、自分の頭で考え、自分で判断したことを、自分の言葉と行動で表現するーーそうした生き方をすることが、自分を大切にすることになるのです。ぼくが「自分」という言葉にこだわるのは、一人ひとりが人生の主人公になってほしいと願うからです。人の意見に耳を傾けることと、判断や行動を人任せにすることは全く違います。

同じものを見聞きしても、感じ方や考え方はさまざまです。したがって、言葉や行動で表現されることも人によって違います。すべての人の顔が違うのと同様に、考え方や表現も違っていていいのです。この違いを「個性」と言います。

一人ひとりがしっかりとした「凧」になるということは、個性(自分らしさ)を大切にするということです。静かすぎる授業はだめです。ワイワイガヤガヤが一杯の教室にしましょう。いろんな考えや答えがあるから学習が深まるのです。仕事をするときは、指示される前に動きましょう。新しいアイデアは、自分から働きかけることによって生まれるのです。

■大空と心に「連凧」を揚げるということ

「凧」を１本の糸でつなぐと「連凧」になります。しかし、それでは「連凧」の魅力を説明したことにはなりません。「連凧」は、１枚１枚の「凧」をつない

で作ります。それぞれの「凧」は揚がるように作られているのですが、ちょっとかたむくものや、すぐに落ちてくるものもあります。その点では人間の「個性」と似ています。それら１枚１枚の「凧」を 25 枚つないだ「連凧」は、最もよく揚がっていた１枚の「凧」よりもなお勢いよく揚がるのです。人間に置き換えて言えば、25 人の「個性」が集まることによって 30 人分も 50 人分ものパワーになるのです。これが「連凧」の魅力です。

きみたちの１つ先輩は、運動会の応援団や音楽発表会、映画作り、きみたちとのバスケットボール大会などで、すてきな「連凧」ぶりを見せてくれました。きみたちはどんな「連凧」を揚げるのでしょう。大空に勢いよく舞う「連凧」をぼくは毎日思い描いています。そのためにも、まずは自分という「凧」をみがいてほしいと思います。

人が凧と違うのは、大空だけではなく心にも「連凧」を揚げられるところにあります。心に揚がる「連凧」は、目で見ることはできません。それは、大空にいくつ目かの「連凧」が揚がったとき、ポッと姿を見せてくれるのです。それがいくつ目かは分かりません。いつごろかも分かりません。見ないままに卒業を迎えることだってあるでしょう。

心に揚がる「連凧」のことを「なかま」と言います。「仲良し」とはまた違って、言葉で言うのは難しいのですが、ぬくもりがあってほっとできるような時間と空間が広がっています。ぼくは、きみたちと一緒にこの時間と空間を見たいと思います。

おうちの方へ

定期の家庭訪問が終わりました。ご協力ありがとうございました。子どもたちは、多くの人の思いや生活を小さなランドセルに詰め込んで登校しているんだと改めて感じました。私やクラスに温かいまなざしを注いでいただいていることをとてもうれしく思います。

この１か月の生活や家庭訪問を踏まえて、１年間の学級目標を立てました。「凧」と「連凧」は、「個」と「集団」の課題をシンボル化したものです。「個」については、全体的に線の細さを感じています。「しっかりとした『凧』」をめざす中で、人間の根っこの部分を太くたくましいものに鍛えたいと思います。６年生のスタートを歓迎してくれた子どもたちを、「このクラスでよかった」と言って卒業させてやることが、私の仕事だと自らに課しています。そんななかま集団を育てることが、「心に『連凧』を揚げる」ということだと考えています。

どうか知恵と技と体力を貸してください。

かつて経験したことのないほど子どもたちから望まれ､歓迎された担任だった。出会いを綴り、１週間の振り返りを綴り、２週間の振り返りを綴り、わずかにでもいい変化は努めて通信で子どもに返した。何とか最初の１か月の目標は達成できた。

そこでやっと、クラスのめあての登場である。子どもたちが同じ土俵に乗るの

に、１か月かかったことになる。（しかし、実際は集団はもっと深いところで病んでいた。詳しくは書けないが、いつの頃からか女子は問題が起こると、自分たちで解決する習慣を身につけていた。ところが、これが非常に危険な「話し合い」で、力による支配と抑圧の温床になっていた。私はまず自主解決を禁止し、私が全面的に介入することを了解させた。それでホッとした子もいたのだが、子どもたちを覆う見えない圧力のようなものは容易に解消されなかった。）

５月 16 日の『きらきら』№.29 は「風薫り、クラスの胎動を感じつつ…」というタイトルで、「『胎動』というのは母体で赤ちゃんが動くことですが、まさに何かが生まれる前の動きを感じるできごとがありました。13 日の放課後、運動場の東の端で７人の女子がボールで、西の端で６人の女子が一輪車で遊んでいました。ぼくは、バレーボールの輪のとなりにいて、時々参加していました。しばらくすると、６人がその輪に加わり、女子全員が一つのボールを追っていました。それは、６年生になって初めて目にする光景でした。いつもいつもみんな一緒がいいというのではありませんが、これもまたいい光景だと思いました。」というコメントが添えられている。これが実情だった。

数日後の通信から３回「ひとりつぶやき」が登場する。届けたいＡさん、Ｂくんが存在した。これもクラスの実情だった。

★☆★ひとりつぶやき★☆★

■ 10 の誠意■　（『きらきら』№.33　2005.5.20）

「10 の誠意に対して 10 の誠意で答えてくれる人が好きだ」－－友だちとか友情といったことについて書いた 10 代の頃のノートに、そんな１節がある。「誠意」とは、「うわべだけでない、心の底からの本当の気持ち。真心」のことを言う。友情は誠意と誠意で育てていくものだと、30 年以上たった今も考えている。

友だちの問題は、子どもにとって重大問題だ。だれもが悩み苦しみながら、大人への階段を上っているのだ。ぼくが出会ってきたたくさんの子どもたちの中から、３つ紹介しよう。

Ａくんは体が大きく、力も強かった。Ａくんの周りに人は集まっていたが、特に親しい友だちはいなかった。みんなはＡくんの力が恐くて言うことをよく聞いた。ある時、Ａくんはぼくに言った。「本当の友だちがいない。さびしい。」「さびしさをまぎらすために、悪いと思っていても暴力をふるってしまう。」「友だちがほしい。」と。

女の子たちの中にグループがあって、ある時ふと気が付くと、グループの全員が同じデザインのキズテープ（そのころバンドエイドという商品がはやっていた）を手首にはっていた。テープは、同じグループの友だちであることの“しるし”

だった。同じ“しるし”がないと不安になる。ぼくは、「バンドエイドのつながり」と呼んだ。

ある時、一人の女の子が小さなプレゼントの包みを持っていた。よく見ると、同じ包みを持っている子が数人いた。彼女たちはみな、同じ仲良しグループの子たちだった。グループの中でもめごとがあって、一人の子が「ごめんなさい」という気持ちを伝えるために渡した物だった。手を触れると壊れてしまいそうな友だちとの関係。ぼくはそれを「ガラス細工の友情」と呼んだ。

どれもこれも、結局はうわべだけの友だちでしかなかった。彼ら彼女らがぼくの心から長く離れないのは、うわべたけの現実からスタートして、「10 の誠意に対して 10 の誠意で答える」ような友だちに向かって、悩み苦しみながらも歩んだからだ。その姿を、彼ら彼女らのとなりにいてぼくは見てきた。そう、友情は誠意と誠意で育てていくものだ。

■楽しいウソ・悲しいウソ■　（『きらきら』№.34　2005.5.23）

ウソには、楽しいウソと悲しいウソがある。楽しいウソは人を幸せにし、悲しいウソは人を、そして自分をも、不幸せにする。

大笑いをして終われる楽しいウソは、人をあたたかい気持ちにしてくれる。信頼関係があるからこそ成立する笑いなのだが。

悲しいウソには、自分を守るためのウソと人を守るためのウソの２つがあるように思う。たとえば、いたずらがバレて怒られそうになったとき、責任逃れのためにとっさにつくウソが、自分を守るためのウソだ。それに対して、いたずらをした友だちをかばうためにつくウソが、人を守るためのウソだ。（本当は、人を守るためのウソには別の種類の物もあるのだが、今は省く。）

教師になって 27 年。ぼくは、たくさんの悲しいウソを見てきた。今確かに言えることは、結局のところウソでは自分も人も守れないということだ。たとえ他人をだますことができても、自分自身をだますことはできない。ウソをついた自分を一生背負っていくことになる。そんなとき、ぼくはいつも思う。この子はウソをつくことで、人からの信頼を捨てるのと引き換えに何を得ようとしているのだろう。本当の友だちを失ってまで守るものって何だろう。ぼくは、未だその何かを見たことがない。笑えないウソは悲しい。

■つながる言葉・切る言葉■　（『きらきら』№.35　2005.5.24）

言葉には、人とつながる言葉と人とのつながりを切る言葉がある。

Ａさんは、Ｂさんに打ち明けた秘密をＣさんにバラされた。Ｂさんを信じて打ち明けたＡさんはショックを受けた。そして、ＡさんはＢさんに向かって言った。「あなたって、最低。」

Ｄくんは、Ｅくんのミスで試合に負けたことが悔しくて仕方なかった。すっかり沈み込んでいるＥくんに向かって、Ｄくんは横目でにらみつけるような視線を送った。

Ａさんの「最低」という言葉も、Ｄくんの「視線」も、ともに人とのつながりを切る言葉だ。「視線」を言葉というのは変かも知れないが、時として目は口以上にものを言う。Ａさんはもう二度とＢさんと顔を合わせないつもりだろうか。Ｄくんは金輪際（こんりんざい）Ｅくんとは遊ばないつもりだろうか。少なくともＢさんやＥくんにとっては、それほどに重い言葉だと承知の上で使っているのだろうか。つながりを切る言葉の傷は、鋭いナイフで刺（さ）された傷よりも深い。

「あなたを信じていたから、今私はとても悲しいの。今度から秘密はちゃんと守ってね。」「今日の試合を楽しみにしていたから、負けたのはすごく悔しい。もっと練習をしようぜ。」ＡさんやＤくんが、先ほどの場面でこんな言葉をかけていたらどうだろう。自分の悲しい思いや悔しい思いを相手に伝えているが、決して相手を責めたり切り捨てたりしていない。それは、ＢさんやＥくんがこれからも付き合っていく友だちだからだ。人とつながる言葉は、きりっとしていて、それでいてどこか優（やさ）しい。

２か月を迎えた６月８日の『きらきら』№49。病の根は深い。

■■小学校6年・学年つうしん

きらきら MORE

2005. 6. 8（水）

No. 49

満２か月のクラスを見つめて

■大家美沙子■　私は、この日記を書く時、六年生になってからのいろいろなことを思い出した。一つは、もともとあまりまとまりのなかったクラスが、少しずつであるが変わってきているということだ。休み時間にドッジボールをしたり、バレーボールをしたり、こんなことは五年生の時には一度も見られなかった。だから私は、六年生になってから一人ひとりの何かが変わってきていると思う。

■今西菜緒■　私たちは六年生になって学校に来た日が約二ヶ月たつ。私たちのクラスは、少しずつかわっているようにも思えるんだけど、まだ形にはなっていないと思う。クラスのふんいきがかわったからか分からないけど、私としては自分の意見を五年生の時よりしっかり言えてると思う。

■匿名■　今の教室の居心地は前よりもいいけど、四・五年生の感じが残っているのでまだしんどいです。

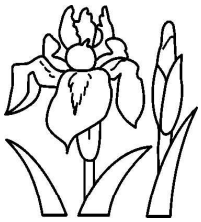
■幸田早苗■　今、学級は私にとって四月と比べてよくなっていると思います。

男子と女子で遊ぶのも多くなったし、女子の友だちとも前より遊ぶようになったし、授業も楽しくなったし、明るい学級になっていると思います。もっと明るい楽しい学級にしたいです。
■匿名■　正直なことを言うとこの学級に興味を持てません。
■田中沙季■　「学級の日？」私は最初そう思った。でも、よく考えると大事な日だと分かった。私は、六年生になってからのみんなはとても明るくなって良いと思う。けど私自身、やっぱりＫくんに学校へ来てほしい。そして新しく来た泉岡くんや中川くんとも友だちになってほしい。いつからか来なくなってしまったけれど、今のクラスならＫくんを迎えてもっと楽しいクラスにできるはずだと思う。一部の男子もＫくんと遊んでいるみたいだし、私はみんなで卒業したい。だから学級の日までにＫくんが机に座らなかったのは少し残念だ。でも、学級の日を通して、Ｋくんにみんなのことをもっと分かってほしい。私はずっと待っている。あの空いた席にＫくんが座るのを。
■木﨑唯■　私が今の学級について思うことは、少しまとまりができてきているけど、まだまだばらばらだと思う。だからこれからはまとまりのある学級にしていきたいと思う。でも、他にも直していかなければいけないことがたくさんある。たとえば、もっと学級が明るくなっていかなければならないと思う。授業も静かだから、もっと私は発表などしていきたいと思う。私がもう一つ思っていることは、Ｋくんが学校に来て六年生二十五名がいっしょに勉強や協力し何かを作ったりなどしたいと思う。私が思うこの学級の目標の一つは明るい学級になること、二つめはまとまりのある学級になること、三つ目はＫくんが学校に来て二十五名そろうこと。これが、私が思う今の学級の目標だと思う。この目標は、一人ひとりが努力しないとぜったいできないと思う。

４月６日の学級開きから２ヶ月が過ぎた。今の私たちを見つめながら、１ヶ月後の私たちをイメージしたい。
多くの人が、学級の雰囲気が良くなっていると書いている。空席になっているＫくんの机に目が届くようになったのも、教室の空気と無関係ではないはずだ。事実、休み時間や放課後の姿が目に見えて変化した。これはすばらしいことだ。しかし、その大きな輪の中に加わっていない数人の人がいることも事実だ。その人たちが、居心地の悪さを訴えている。
ところで、私たちがめざしているのは１枚の大凧ではない。小さな凧が１本につながって揚がる連凧だ。１枚１枚の凧は、あくまでも自立していなければならない。ぼくの言っていることは難しいだろうか。
ある人が、こんなことを書いていた。「Ａさんが、『Ｂさんたちもドッジボールに入れてあげてほしいね。』と言った。私は、なんで自分で言わへんねんやろう

と思った。」「係の仕事をしていたので、『先に行っといて。』と言うと、『行くまで待っとくわ。』と言った。私はその時あせった。自分が早く行かなければ、友だちは遊べないというあせりだった。」

特別な人を作ってしまう教室は、さまざまな居心地の悪さを生んでいる。遊びの場面に限らず、自分の気持ちを自分のコトバで語らないことが、この居心地の悪さの原因になっているとぼくは考えている。学級委員の木﨑さんが、課題を整理してくれている。一人ひとりが自分のコトバで語るようになれば、今西さんが感じている「違和感」を越えられると思うし、本当の意味で明るい学級になっていくのだと思う。居心地のいい学級はだれかが作ってくれるものではない。揚がらない凧を何枚つないでも、結局は揚がらないのだ。まずは、自分がしっかりとした１枚の凧になれる努力をしよう。



７月７日の修学旅行報告集会と８日の七夕集会でわずかな光明が見える。

「すてきな七夕の日になりました。『彦星』と『織姫』がともに輝いていました。それは一瞬の出来事ではありましたが、たしかに私たちのクラスは一つになっていました。やっぱり、歌声はクラスの姿を映す鏡です。

覚えておいてください。精一杯取り組んだ者だけが味わえる、緊張感の向こうにある満足感というものを。坂本さんのしっかりと前を見つめる姿はとてもかっこよかったです。わずかなミスなど、ましてや積極的に攻めていったミスなど、気にすることありません。

２学期にもみんなに見てもらう機会があります。今度はもっと輝きたいものです。」

（『きらきら』№.63　2005.7.8）

「７月８日は私たちのクラスの記念日になりました。一緒の気持ちで一つの時間を過ごすって、なんてステキなんでしょう。これは、『おてがみ』の世界だとぼくは思っています。ぼくは今、『かえるくん』と『ガマくん』のような幸せな気持ちに包まれています。

７日の報告集会、８日のお楽しみ会が、このクラスの３か月の到達点です。」

（『きらきら』№.65　2005.7.12）

「ぼくらのクラスのある変化について話しておきたい。今回のお楽しみ会は、プチ・スポーツ・ゲーム係という学級の係が担当した。喜多さん、久保西さん、坂本さん、籔内さんの４人だ。自分たちがゲームに参加できなくても、みんなが喜んでくれることを楽しみに一生懸命仕事をするというクラスの『文化』が育って

きた。そして、そのことを感じ取り、日記に書きとめる心も、クラスの『文化』として育ってきた。これはすごいことなんだ。

ぼくらの１学期は、間もなく終わろうとしている。決して 100 点のクラスになったわけじゃない。『宿題』も一杯残している。でも、悲観することはない。９月になれば､今よりもっとステキな一歩が始まりそうな､そんな予感がしている。」

（『きらきら』№.66　2005.7.12）

行事は、集団づくりの強力な武器だ。別のところで述べる予定だが、その機会をうまく生かすことが教師の仕事である。

さて、このクラスの２学期以降については、「第３章　フリーハンドの総合学習」の「第６節　集団づくりとしての総合学習」で紹介したいと思う。